

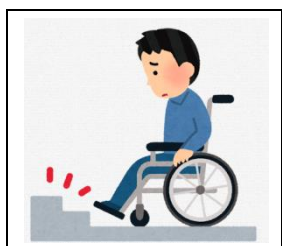
インクルーシブ教育と人権モデル (研修報告)

障害の捉え方には 医学モデル・社会モデル・人権モデルがあります。

両足に麻痺があって歩けないので、車いすで移動する障害のある人がいました。
 図書館に行こうとしたら、入り口に段差があっては入れません。

➡医学モデルの捉え方で説明すると…

この方の両足に麻痺があって歩けないから、図書館に入れない。
 この方の両足に麻痺があることが「障害」「機能障害」
 不利益の原因をその個人に求めるのが、医学モデル
 …障害を治そうとする考え



➡社会モデルの捉え方で説明すると…

図書館の入り口に段差があるから、この方が図書館に入れない。
 図書館の入り口に段差があることが「障害」「社会的障壁」
 「社会的障壁」とは、あらゆるバリアのことです。例えば、段差、偏見、
 排他的ルールなども含む。

社会的障壁（例えば段差）を解消すれば＝社会が変われば

障害（例えば図書館を利用できない）は解決し、障害は消滅する
 周りの考え方を変えたり、仲間の助けなどでも障害でなくなる

→学校では仲間・クラスづくり

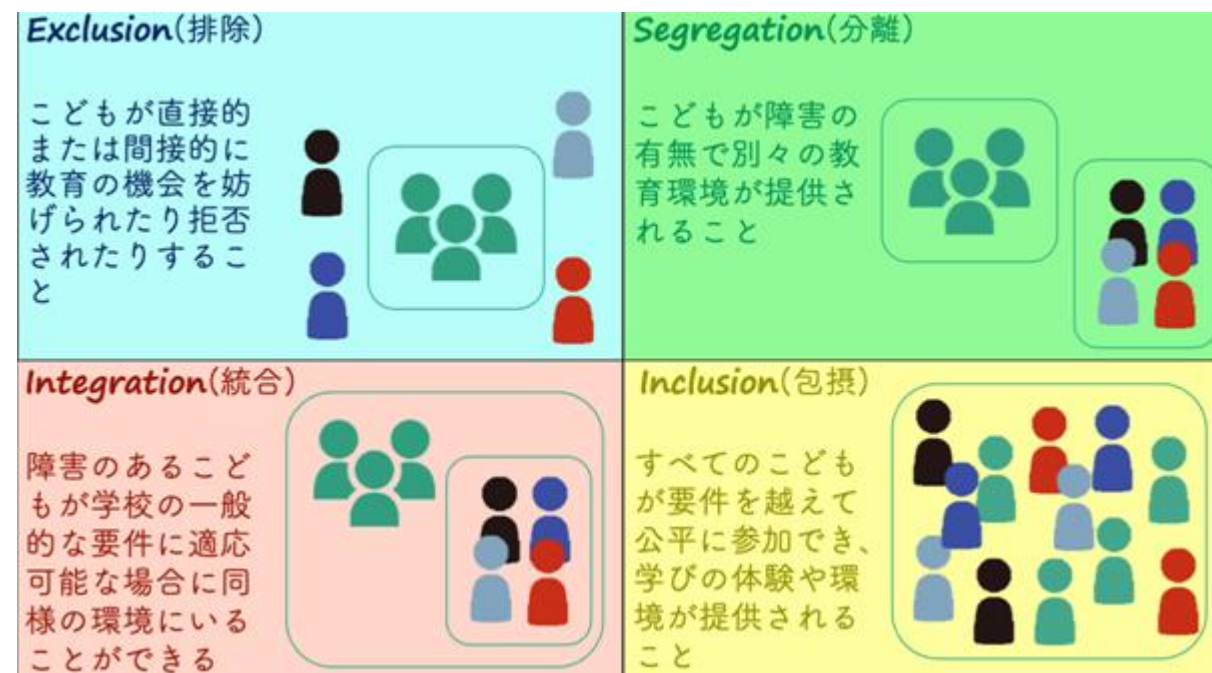
以前は、障害を医学モデルで捉えていたが、社会モデルで捉えるようになっていった。
 さらに、最近は人権モデルで考えるようになっていく。

- ・一人ひとりの尊厳を侵害しない、差別や排除をしない、多様性や差異を尊重する
- ・機能障害も含めた「ありのまま」を人権、尊厳、多様性として、価値のあるものとして認める（障害を治すとか健常者に合わせるという考えではなく）

➡それが人権モデル

どんな人でもありのまま、地域でその人らしく生きる権利がある

インクルーシブ教育とは



★個別の支援をするために、その子どもだけ別の場所で教育を行うことは分離→差別

★既存の教育の標準を変えないまま、そこに障害のある子を入れる、つまり普通学級にただそのまま入って何の支援も合理的配慮もなく、普通学級に入れることは統合→差別

★すべての生徒がありのままであることを認められ、同じ場所で一緒に学ぶのが包摂（インクルージョン）。いわゆる「普通」という枠にそれぞれの子どもを合わせるのではなく、どの子どもも過ごしやすい、ともに学ぶ環境づくりが大切。

校内研修での上田さんがお話されていたように、小中学校からすべての子どもがともに学び ともに育っていかないと、社会に出てから共に生活していくことはできません。豊中市障害児教育基本方針にもインクルーシブ教育の目的は「共生社会の形成」「障害のある子どもの可能性が最大限のびること」とあります。障害のあるなしに関わらず、すべての子どもの可能性を最大限のばしていきたく思います。とは言っても、私たち個人に何ができるのかなと思ったりします。まずは、人権モデルの考え方で授業の方法や、クラスや学校の在り方を見つめなおしてみることが大切だと思います。

※ 裏に先日の研修会の感想を載せています。

～先生方の感想～

- 人は何もしなかったら分けたがる、という言葉が心に残りました。これからの人生も十分に気をつけようと思いました。
- 分けることがいいことなのか悪いことなのかは難しい事で僕にはまだわからないことだらけでした。
- 日頃からどの生徒にも同じような態度で関わる方がいいなと感じました。
- 「差別」という言葉を発するのは簡単ですが、どんな人も得意不得意があるので、人それぞれ生きていく上では助け合いが必要だと感じました。
- 色々な選択肢のある社会を目指すべきだと思いました。
- ともに生きること、過ごしていくことの大切さを改めて考える時間となりました。ありがとうございました。
- 最後の分けたがるという言葉にどきっとした。考えてみると自分も無意識のうちにたくさんのかんことを分けていることに改めて気づいた。
- どの考えがベストかはわからないがいろんな考えがあることを改めて感じた
- とても深い話が聞けました。障害を持っているとか言う前に、人生を楽しんでおられるのが分かりました。上田さんのお話を聞いているうちに障害があるからとかないからではなく、自分もできないことはたくさんあるし、それを乗り越えて挑戦しようと言う気持ちになれました。
- 行動力のすごい方だなと感じた。色々な経験をされているからこそボランティアとして活動ができるし、活動する勇気が本当にすごいと感じました。学年の支援在籍の生徒ともっと関わっていこうと思いました。ありがとうございました。
- 障害を持つ方からの視点で豊中市のインクルーシブ教育についてお聞きするのは初めてだった。実際のところ今までいろんな場面があり、難しさも感じていたが非常に大切だということがわかった。
- お話しを伺うのは2度目です。今回も楽しい講演でした！
- ともに学ぶ学校が、全ての人の幸せにつながるんだと思いました。みんながいて、当たり前思い出のシーンを作っていくことができるということが、とっても大切だと思いました。
- インクルーシブ教育が本人にとっても、周りの子どもたちにとっても良い影響を与えていることが伝わってきました。障害によって分かれることなく学校に通うことで、豊中の子どもたちが大人になった時、世の中には色々な人がいるのが当たり前だと思えて、共生社会が実現されていくと思います。
- 共に学び育つ教育が満遍なく全国各地に整備されていくように豊中で教育をしている私たちが推進していかないといけないと感じました。インクルーシブ教育と言われていますが、実際に障害をもっている方の経験を通して小さい頃から大人になるまで色々な場面を振り返りながらお話いただき説得力のある話が聞けました。また、インクルーシブで育っ

- てこなかった人の意見なども聞けたらと思いました。本日はありがとうございました。
- 同じ教室で学ぶことの意味を改めて考えました。数年前に卒業して10年後の同窓会に旧担任として呼ばれ、その場所に当時の支援在籍の支援生も参加してしまいました。今でも繋がってくれていることに繋がってくれていることに感激したことを覚えています。その子にとっても上田さんのような思いが感じてくれていたら嬉しいなと思いました。
 - 「ウエダさんやからできるんや」という発言には反発されていたが、本人が困難に直面した時に前向きになれるかも結構大事なこともかもしれないと考えます。前向きになるように教育が関わらなければならないのは分かるものの、本人の考え方、行動もその後を決めるものであることは確か。本人の資質などはいったん横に置いておくとして、周囲の協力・理解も同時に必要かとも。学校側は当然として、家庭（いわゆる障害を持った家庭も、そうじゃない家庭も）も我が子がインクルーシブ教育によりぶつかる壁を安易にすぐさま排除することをせず、共に乗り越えていく態度と姿勢がなければ、また「分ける教育」に戻るのだろうかとも感じました。
 - 「共に育つ」ということが理解につながる、というのはその通りだと思います。ですが、「支援学校をなくせば差別がなくなる」は別の問題だと思います。そこを一緒にするのがわかりません。大事なものは「選択できる」ことなんじゃないかと思います。ちょっと問題は違いますが、不登校問題などでは、特別扱いをしないことが不応や不登校につながります。そういう対応が必要な子もいる・増えてきていると思います。インクルーシブと言いますが、放り込んで終わりの今の豊中市のインクルーシブ教育は半分崩壊している、または、限界に来ていると思います。障害者は支援学校に行けば良い、分ければ良いと言っているのではなく、一緒にすれば良いという単純な問題ではない。支援は必要なんです。『原』学級保障は中途半端。ダブルカウントは認めないとか意味わからんすぎるし。支援学級在籍者がいることで40人を超える学級ができてしまう、よりパーソナルスペースが必要な人がより過酷な環境にさらされる場合もある。豊中市はインクルーシブ教育の旗手を気取っているが、それならダブルカウントも認めなあかんし、障害の有無・程度によってもっと弾力的なクラス編成を認めなければいけない。教員・介助員の増員配置も含めて。それをしないんだったら豊中市はさっさと看板を下さないといけない。研修の感想で無くなってしまったので、この辺で終わります。
 - 今日の話は、端的に言うと心に残る内容が多かった。インクルーシブについて改めて考える機会を持った。
 - 今回の上田さんのお話を聞いて色々過去を振り返るきっかけになったと感じました。支援学校に通うことでその生徒が安心して過ごせる、幸せになるわけではない。思い出は大人には作れない。本人にしか作れないという言葉がとても響きました。